学習院・永青文庫・東洋文庫 三館連携展示「東洋学の歩いた道」特集

昔も今も縁の深い三館

「展覧会を開催する上で、人脈はとても重要である」とは、当館が毎年60人ほど受け入れている博物館実習生たちにしばしば話すことです。この度、学習院・永青文庫・東洋文庫が連携して展覧会を開催する意図は、三館同士の歴史的な繋がり、特に人的ネットワークが大きいという点が重要であるのは言うまでもありません。詳しくは展示を御覧いただきたいと思いますが、白鳥庫吉、岩崎久彌、近衛篤麿、細川護立といった近代日本を語る上で欠かせない人物達が三館に密接に関わり、「東洋学」の発展に寄与しました。

しかしこうした重要な歴史的背景が備わっていても、実際、展覧会開催に漕ぎつけるのはなかなか難しいものですが、今回それを実現できたのは、三館の学芸担当者がかつて学習院という学び舎を共にしたという背景があります。業務多忙にも拘わらず、こちらの構想に快く耳を傾け、労を惜しまず最後まで共に走り続けてくれたことに、この場を借りて感謝したいと思います。それから、資金面において通常不可能な展示方法や図録の作成、研究員の動員が可能となったのは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（学習院大学学長付国際研究交流オフィスとの共同事業）の助成を受けたことによります。重ねて感謝申し上げます。

（助教　鎌田純子）

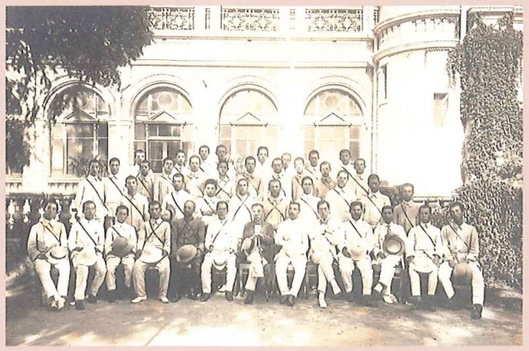
学習院大学史料館特別展「アジアを学ぶ—近代学習院の教育から」

平成25年10月5日（土）～ 12月21日（土）

学習院は、明治21年（1888）、三浦梧楼が院長に就任すると教育改革に着手、歴史の授業数が大幅に増やされました。その中には、日本で初めての東洋史の授業「東洋諸国歴史」が組み込まれ、担当教員に白鳥庫吉があてられました。東京帝国大学で西洋史を専攻した白鳥は、手探り状態で東洋史の授業を開始しました。やがて近衛篤麿院長の下、アジアからの留学生を受け入れ、また修学旅行では中国や台湾、朝鮮へ渡航しました。こうした過程において、白鳥をはじめとする歴史地理課の教員が中心となり豊富な教材類（実物教材、標本、写真、絵葉書など）が収集されてゆきます。

今回の展示では、近衛や白鳥に由来する書籍、旧制学習院の東洋史の授業で使用されたと考えられる教材類、こうした教育をうけた学生達がその後どのように東洋への関心を展開させたか、という3つテーマに分けて学習院と東洋学について考察してみたいと思います。

（助教　鎌田純子）



駐北京日本公使館での海外修学旅行団集合写真　大正7年7月28日撮影（学習院大学史料館蔵）

唐三彩鎮墓獣俑（学習院大学史料館蔵）

朝鮮家屋模型（学習院大学史料館蔵）

永青文庫秋季展示「古代中国の名宝—細川護立と東洋学」

平成25年10月5日（土）～12月8日（日）

永青文庫は、昭和25年（1950）、熊本藩54万石の大名であった細川家の16代目当主細川護立（1883～1970）によって、自身が蒐集し、あるいは細川家に伝来した文化財の散逸を防ぎ、研究、保管、公開するために設立されました。

今回の展示では、設立者であり、美術品コレクターであった細川護立の蒐集した古代中国の文物を取り上げます。

細川護立は、華族の子弟として学習院に学びましたが、大名家の嗜みとして幼時より漢籍に接し、十代には漢学者の竹添井井（1842～ 1917）から漢詩を学ぶ一方で北京を実際に訪ねるなど、中国の文化や文物への親近と憧れが幼少年期から強くありました。長じては大正14年（1925）に始まる楽浪遺跡の発掘支援も行っています。

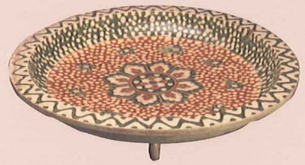
大正15年（1926）5月にロンドンで開催の万国議員商事会議に貴族院から派遣されると、護立はこれをヨーロッパにおける東洋美術の鑑賞と研究の絶好機とし、著名な美術蒐集家や美術商を訪ね、学者と交流しました。この旅行と、楽浪遺跡の発掘が契機となって、重要文化財の「三彩蓮華文圏足盤」と「三彩宝相華文三足盤」、国宝「金彩鳥獣雲文銅盤」、同「金銀錯狩猟文鏡」など古代中国の陶器や金属製品を護立は蒐集していきます。

国宝　金銀錯狩猟文鏡（永青文庫蔵）

蒐集に際して護立は、東洋陶磁研究所の奥田誠一（1883～1955）や京都帝国大学の梅原末治（1895～1983、東洋考古）、同じく狩野直喜（1868～1947、中国学）ら親交のあった学者に助言や、入手したものがいかなるものかという情報を求めました。学者たちも護立の要請に応える一方で、学術的な探究心から護立蒐集品の展覧会への出品や熟覧を求め、展覧会とその図録や、彼らの論文、著書で研究成果が公表されました。護立は、発掘の援助だけでなく、蒐集によっても東洋学の進展に寄与したといえます。

永青文庫の展示では、東洋陶磁や東洋考古の学者や芸術家たちとのこのような交流に光を当てながら、細川護立が蒐集した名品を取り上げます。多くの方々にご覧いただければと願っております。

（永青文庫学芸員　三宅秀和）



重要文化財　三彩宝相華文三足盤（永青文庫蔵）

東洋文庫ミュージアム企画展示「マルコ・ポーロとシルクロード世界遺産の旅—西洋生まれの東洋学」

平成25年8月7日（水）～ 12月26日（木）

東洋文庫は大正13年（1924）に三菱第3代社長の岩崎久彌（彌太郎の長男）が設立した東洋学研究のための図書館です。東洋学の専門機関として、国内においては最古の歴史を有し、最大の規模をほこります。日本を含めたアジア・アフリカに関する学術資料を100万点余り所蔵しており、そのなかには国宝や重要文化財に指定される貴重書も数多く含まれております。東洋文庫は今日、こうした蔵書の管理や閲覧に関する図書館業務、所属研究員による所蔵資料を用いての研究活動、さらにはミュージアムにおける展示を通じて一般への普及活動に力を入れております。

蔵書の内訳は、「東洋」文庫らしく、漢文で書かれた中国関連の書籍が約4割と最多を占めます。その次に多いのが洋書で、約3割を占めています（残りは、約2割が和書、約1割がアジア諸言語となります）。意外に思われるかもしれませんが、東洋文庫のコレクションの粋は、じつは洋書に求められます。

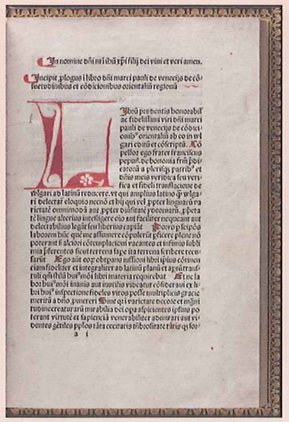
ウィリアム・ブラウ「アジア図」（東洋文庫蔵）

東洋学はそもそも、非西洋世界の「東洋（アジア・アフリカ）」に関する知識と理解を深めるために、近代ヨーロッパで成立した諸学問の総称です。その際に学者が参照したのが、東洋から帰還した商人、探検家、キリスト教の宣教師の記録でした。東洋文庫は彼らの足跡をたどれる貴重書や絵画、古地図等を多数所蔵しております。

東洋文庫の洋書コレクションのなかでも特に知られているのが、世界最多77種類に及ぶマルコ・ポーロの『東方見聞録』です。今回はコロンブスも愛読したという、1485年にグーテンベルク印刷機で刷られたアントワープ刊本を特別に展示します。『東方見聞録』は近代ヨーロッパの東洋学者には座右の書であり、フランス東洋学の巨人ペリオも詳細な注釈書 *Notes on Marco Polo* を著しました。ヨーロッパの東洋学はマルコ・ポーロに始まったと言ってもよいかもしれません。

本展ではマルコ・ポーロが旅した陸と海とのシルクロードの道中をたどり、そこに点在する世界遺産の数々を東洋文庫の所蔵書画から構成するというユニークな試みです。マルコ・ポーロを水先案内人として、東洋学の時間旅行をじっくりとご堪能ください。

（東洋文庫主幹研究員　牧野元紀）



アントワープ刊本　マルコ・ポーロ『東方見聞録』（東洋文庫蔵）